

11月中旬を過ぎて、毎日に冬の訪れを感じます。
どのクラスも12月の発表会に向けての「いっしょけんめいさ!」が「感じる毎日」です。

でも、その練習が終わると、ホールはどちらのこと、廊下や教室ではこどもたちの歓声が所せまとはばかり響いてあります。

■「こどもの聴く力」というのをどのように考えますか!

もしも、こどもに聴く力が身に付いていないと、教師がどんなに熱く説明しても、吸収してくれません。

幼児期から学童期、少年少女期を経て青年期へと育ち行く過程でとても大切な「こどもの力」です。

自給自足のこどもたちは、のほろ組、年少組の幼い頃、日々の幼稚園生活を通して、「聴く力」を身につけてきました。

それを基礎にして、年中組になると更に「聴く力」を発揮して、パルンパ鍵盤ハーモニカと言った年長児で指導される

べき課題をクリアしてきました。

年中組たちは、この活動の前に「グリセカード」を使う音符や休符の長さを知ったり、リズム打ちをしたり、ドレミ体操で絶対音感を一人ひとりが身に付けました。



「聴く力」の賜です。

年長組になると高度な理解力を必要とするハーモニカに挑戦し、ハンドベルにも挑戦しております。

年長児一人ひとりが「聴く力」

をしっかりと身につけているから、教師の熱い指導をどんどん吸収してくれます。

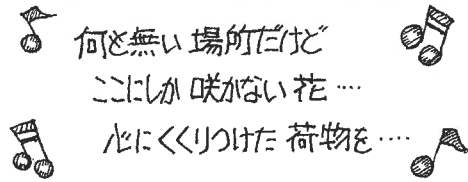
そんなこどもたちの育ちぶりを秋の運動会についで、12月の生活発表会でごらん頂きます。

楽しみにお待ちください♡

(心の育ちシリーズ)

いい子でいいんですか?

-みゆき中央新聞- 81



あのゴブクロの歌の「ここには咲かない花」の一節である。この曲を聴いた臨床心理士の長谷川さんは、唄の中のここと言うのは家庭と言う場所をイメージしたと言う。

「甘えの究極の形は、こどもの存在を無条件で喜ぶ事です! 何も無い場所だけどここには咲かない花があると言うのは、我が家に生まれたこの子は「ここには咲かない花」と言う気持ちがあれば子どもに伝わります!」と。

長谷川さんは、こどもはこどもらしく生きる事が大事だと言っている。こどもらしく生きるとは、第一に「甘える」ことである。

昔の親は厳しかった。どんなに厳しくてもこどもには「逃げ場」があった。親の目の行き届かない所で思い切り「こども時代」を過ごしていたのである。今の時代、親の厳しさとは、「親の期待通りに生きること」を強られることだろう。エリート家庭の子が暴走するのは、その影響だと。

「小学生でいい子!」と言うのは精神発達上おかしいんです。子どもは自己中心で悪さをしたり、さぼったり、これがその時期の本当の姿なんです! 「自分の欲望のままに生き、その中で沢山の失敗を重ね、時には親から怒られながら分りある大人に育ち行くその時にゴブクロの唄が聞きたらいい。「あの優しい場所は今でも変わらず僕を待っていますか?」」